

琉球弧世界遺産学会（通称フォーラム）が5月末に一周年を迎えます

2000年に初めて沖縄から世界文化遺産が誕生しました。登録へ全力を傾けたメンバーを中心に学会を創立しました。沖縄大学での概論、名桜大をふくむ検定試験や事前講座など実績を積み重ねてきました。総会へのご出席、ぜひよろしくお願い申し上げます。



琉球弧世界遺産学会（通称：琉球弧世界遺産フォーラム）
平成27年度総会

日時： 6月20日（土）午後1時～3時
場所： ウェル・カルチャースクール
〒902-0072 那覇市真地329-1
* 駐車場完備

総会次第

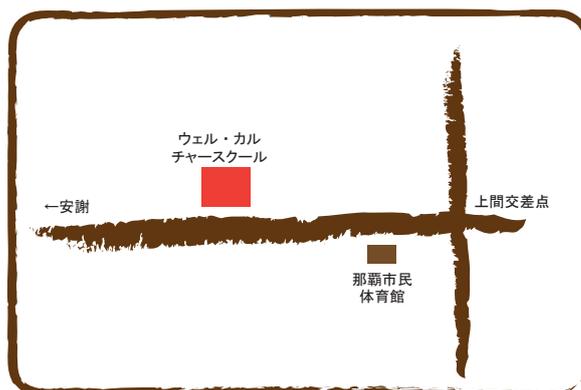
- 一 當眞嗣一会长挨拶
- 一 平成26年度事業・会計報告
- 一 平成27年度事業計画

基調講演

環境省那覇自然環境事務所長

二胡演奏

上地エリサ氏



時：2015年1月31日（土）第一部：午後3時から5時、第二部：午後5時半～
 所：第一部：沖縄大学3号館101、第二部：沖縄大学3号館横の調理室

第一部 司会：緒方修（琉球弧世界遺産学会事務局）

1. 「チャンドララル氏と八重山を歩く」（石垣ケーブルテレビ制作）
 講師：ディリープ・チャンドララル（沖縄大学副学長）
2. 「琉球のグスク」
 講師：眞嗣一（琉球弧世界遺産学会会長）
3. 「世界遺産に学ぶ」
 講師：花井正光（琉球弧世界遺産学会副会長）

第一部は、石垣ケーブルテレビ制作「チャンドララル氏と八重山を歩く」のフィルムを上映（30分）。上映に先立ってチャンドララル氏から出身地であるスリランカの歴史と、当地の世界遺産（文化遺産6、自然遺産2）の一つである、聖地キャンディの紹介があった。キャンディの仏歯寺には、お釈迦様の聖遺物として崇拝される犬歯が祭られており、4世紀にスリランカに伝わって以来、王権の権威の象徴でもあったという。

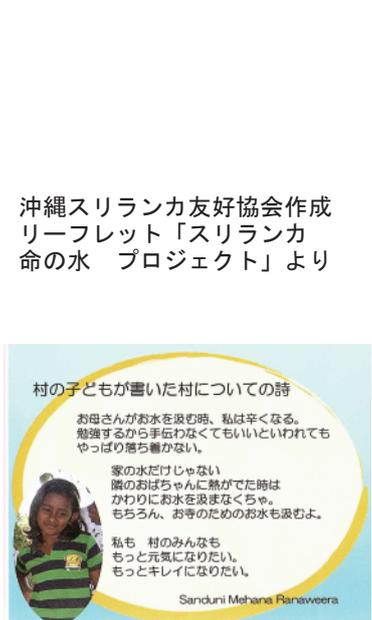
また、沖縄スリランカ友好協会会長を務めるチャンドララル氏は、現在、沖縄発「スリランカ命の水プロジェクト」に取り組んでいる。同プロジェクトは、女性や子どもたちが往復約2時間かけて井戸水を調達しているスリランカの中南部にある農村に、汲み上げポンプと電源設備の設置費用を調達しようというもので、2015年秋には村での引き渡し式を行なう予定とのこと。

次に眞嗣一（琉球弧世界遺産学会会長）が、グスクの魅力を熱く語った。現在「琉球王国のグスク及び関連遺産群」として5つのグスクが世界遺産に登録されているが、琉球には約400のグスクが確認されており、氏はこれまで200以上のグスクを踏査し、そのうち100か所以上のグスクの縄張図（平面プラン）を作成した。

グスクの多義性、多系性が言われているが、津堅島のクボウグスクや伊平屋島のヤヘグスク、田名グスクなどの縄張図を読み解くと、軍事的な施設としてのグスクの存在が浮かびあがってくるとのこと。今後も体力の許す限り、グスクの縄張図の作成に取り組んでいきたいと結んだ。

花井正光（琉球弧世界遺産学会副会長）は「世界遺産に学ぶ地域遺産の保全と活用」と題し、世界遺産条約ができて40余年が経過した現在、世界遺産条約の精神が地域遺産の保全と活用に影響を与えている状況を指摘した。

講演会終了後は、会場を沖縄大学3号館横の調理室に移し、沖縄スリランカ友好協会の協力のもと、スリランカからの留学生によるスリランカ料理を楽しんだ。



ベトナムの世界遺産と原発 —ミーソン遺跡にてニントゥアンのチャム人を想う—

吉井 美知子 (沖縄大学 教授)

ベトナムには8ヶ所の世界遺産がある。残念ながら、まだちゃんと訪問していない場所が半数近くにのぼる。ベトナム研究者としては恥ずかしい。そこで2014年12月、思い切って中部ベトナムに世界文化遺産「ミーソン聖域」を訪ねることにした。

ダナン空港から車で走ること1時間、何の変哲もない山のふもとに駐車されている、クルマ、クルマ、クルマ・・・びしゃびしゃと降る雨、色とりどりの傘や雨合羽の中、列をなして歩くこと15分、小さな峠を越えるとレストハウスと赤レンガの遺跡が見えた。

ガイドを取り囲む人垣、多国語が飛び交う。英語、中国語、フランス語、スペイン語、日本語、・・・ベトナム語はあまり聞こえない。団体をすり抜けながら、表示の説明文を読みつつ、建物から建物へと見学して回る。山中に点在しているから、全部見ようとすれば結構な山道を歩く。

ミーソン遺跡はベトナム中部の先住民、チャム人が7世紀から13世紀にかけて造営したものだといわれている。王国は北から侵攻してきたキン人（今のベトナム多数民族）に滅ぼされた。中国文化圏に入るベトナムの建物から比べると、インド風のヒンドゥー寺院の塔やリングがとて異質に見える。

「あなた方の祖先、ずいぶんがんばって、こんな山のなかにすごいお寺を建てたんですね。」遺跡を見ながら、つついニントゥアン省に住むチャム人の友人たちを思い出して心の中で話しかけてみる。19世紀に完全に滅ぼされたチャンパ王国、最期まで残っていたのはミーソンのある中部地方から500キロ

メートルほど南下した、南部海岸のニントゥアン省だった。ベトナム戦争中までは南ベトナムの版図に入り、「チャム人自治区」としてある程度の自治が許されていた。戦争が終わった1975年以降、その自治区もなくなった。それでも地元の学校では今もチャム語が教えられている。村人の日常会話はチャム語だ。独特の文字があって、本や雑誌もチャム語で出版されている。

そのニントゥアンに、今度はキン人の政府がベトナム初の原発を建てるのだという。しかも2ヶ所のうち1ヶ所は日本が支援する。第一原発も第二原発も、ともにチャム人がかたまっている村に近接している。そして今も人々が信仰の対象としている大事な寺院がこの地域には多く存在している。

ミーソン遺跡はベトナム戦争中、戦場となって大変な被害を受けた。世界遺産となった今も修復工事が続いている。いま、ニントゥアンのチャム人の友人たちが恐れおののいているのは、フクシマ原発周辺のように自分たちの村が住めなくなるということだ。民族の最期の場所で守ってきた寺院や墓を、捨ててどこへも行けないのだと彼らは言う。



雨のミーソン遺跡



戦争で崩れたレンガ寺院は、がんばれば修復できるのかもしれない。同じく世界遺産の首里城のように、再建することもある。しかし2ヶ所の原発に挟まれた30キロ圏内のポークロンライ寺はどうするのだろうか。事故が起こったら半減期2万4000年の放射性物質とどう折り合いをつけるのか。そしてチャムの人々は？

ふと我に帰ると、ミーソンの観光客の人ごみの中で、ぼおーっとひとりでそんなことを考えていた。急にどしゃ降りになってきた。全部の遺跡を見ることはとうとうあきらめることにする。また来よう、いつになるか分からないけれど。びしょ濡れになりつつ山を降りた。

以上

人類誕生の地 エチオピア南部に住むムルシ族を訪ねて

松原 好之（神奈川県立大学客員教授・進学塾ビッグバン代表）

700万年前、今の中東の死海あたりからアフリカのエチオピア、スーダンにかけて大規模な地殻変動が起こり、大きな地溝帯が生じた。「人類」はそこで、「サル」から分化したと言われている。東アフリカで誕生した人類は直立歩行でそこを出、いわゆる、無数のザ・グレートジャーニーを経て地球上のほとんどこに行き渡り、最果ては、南米大陸パタゴニアの最南端ウシュアイアに行きついた。十数年前、私の知人でもある、探検家で医師の関野吉晴氏は、ウシュアイアから人力で人類のたどった道を逆走し、足かけ10年かけて東アフリカに「戻る」探検を成功させた。

2年前、私はいきなり人類誕生の地、東アフリカのエチオピア南部に飛び、名にし負うムルシ族を訪ねた。ムルシ族は、女性が自らの唇を切り引き延ばしてそこに皿を嵌め込む、私たちから見れば奇怪に思える顔で知られた部族である。その理由は諸説あるが、「部族の女性が奴隷として拉致されないようにわざと顔を変えた」というのが有力だそうだ。考えてみれば悲しい理由である。外へ出るとひどい目に遭う、という理由で「ひきこもった」のにひどい目に遭うことを怖れるのは変わりなかったからだ。

ムルシ族の女性も、皿を唇に嵌めるのは外出時のみだそうで、最近は、嵌めないで外出する女性も多いと、長老は“嘆いて”いた。女性に頼んで皿を外してもらおうと、唇はゴムのようにややだらんと下がるが、それほど違和感はない。出しっぱなしの乳房も含めて、日本人の好みに合うような美形の女性もいた。付近には、漁労を生業とするカロ族などがいて、彼らは体中に白いペインティングを施して、これまた観光客目当てに、集合写真を撮らせて現金を稼いでいる。「撮影料」の相場は、ムルシ族が断然高く、カロ族の5倍は要求する。それが人類誕生の地から一步も出て行かなかった彼ら原始部族たちの、今では唯一の現金収入となっている。

それにしても、なぜ、人類発祥以来、人類の多くは過酷な旅を覚悟で、この人類揺籃の地を出発していったのに、ムルシ族やカロ族は、ずーっと、この地にひきこもったままだったのか。単に何万年も「出て行くのが怖かった」だけなのか。それを解いてみたいというのも今回の旅の動機の一つだった。

本質的な答えは見つかりそうもなかったが、一つ得心のいったことがあった。それは、彼らに、計画性とか、新しさ、効率の良さを求める感覚がまるでない、ということだった。今ちょっと頭と体を使えば、あとでものすごく楽になるという考えができない。何千年も、何万年もそのままだ。こうなると「ひきこもり」も数万年に渡る“筋金入り”の称号が与えられそうだ。

「ひきこもり」ということは、現状維持の退屈に耐えるということでもあり、逆にわれわれ文明人は真似をしたくても、なかなかできるものではない。東アフリカから歩いて世界に散ったわれわれの先祖たちは、「ひきこもり」がもたらす平和より、「出て行く」ことでもたらされる“変化”を求めた。その変化が、原始社会にない犯罪や殺戮や残虐や悲哀であったとしても、結果としてためらいはなかったと言える。だから、東アフリカから遠ざかれば遠ざかるほど、「より強い人間」たちが生息することになるだろう、と私は考えた。その話を関野さんに振ってみた。関野さんにはやりと笑いながら、「私も最初はそう考えたんです。それでいくと、南米を南下すればするほど、ますます強くてたくましい人類に出会えるのではないかと、ところが途中から逆になったんです。アマゾンのジャングルに住む原住民たちは弱くて平和を愛する、というか、むしろ平和にすがりついた人々で、絶えず強い他者に怯えて暮らしている弱い人たちです。南米最南端のウシュアイアからマゼラン海峡を渡ったフェゴ諸島の一つに人類最南端に住む文字通りの最南人たちがいるんですが、南氷洋の魚を取る力もなく、海岸に貼り付いた貝類を取って食べて暮らしています。私が最近訪れた時は、老婆が一人暮らしているだけでした。もう亡くなっているかもしれません。」

「では、“強い人々”はどこにいらっしゃるのでしょうか。」
「東アフリカと南米最南端の間のただっ広い地域じゃないですか。」

「ああ、私たちの今住んでいるこの文明社会ですね。」
「そうです、そうです。今でもそこでは争いごとが絶えない、私たちの住んでいるまさにこの文明社会ですよ。“強い人々”とは私たちのことを指しますが、私たちというのは、変化を求めるといふ美名のもとに、実は単に平和に耐えられないだけの人たちなのかもしれません。」
私は、80年代、学園紛争がようやく終息しかけた頃読んだ高橋和己の「平和に耐える思想の構築を！」をふと思ひ出し、“強い人々”のひとりであるわれわれ日本人の課題が戦後70年、高橋和己の生きた学園紛争後30年を経た今でも、消え去っていないことを思った。



韓国の世界遺産 慶州歴史遺跡地区

細田 尚子（日本旅行作家協会 理事）

2000年に世界遺産に登録された慶州歴史遺跡地区は、紀元前1世紀の建国から935年に高麗に併合され「慶州」と改名されるまでの約1000年間、新羅王朝の都「金城」として繁栄しました。東側には仏教伝来時に建てられた「皇龍寺」、西側には王族の古墳「天馬塚」、南山には韓国最古の「三体石仏」、都の中心月城地区には101年築城の王宮「半月城」や離宮庭園「雁鴨池」、天文台「瞻星台」など、新羅時代の数多くの古墳やお寺や仏教遺跡が残っているので「屋根のない博物館」とも表現されます。

新羅・高句麗・百済が覇権を争っていた三国時代は政治や外交が困難でした。その上、第27代善徳女王（在位632年～647年）は新羅で初めて女性として王位についたので、偏見もありました。様々な困難を打破する秘策として善徳女王が建てたのが天文台なのです。

直径5.17m高さ9.4mの徳利のような円筒型で、真南を向いた窓以外に入口はありません。善徳女王は花崗岩を切り出したブロックのひとつひとつに象徴的な意味を込めました。例えば、361個半のブロックは、陰暦の1年の日数。最上部の井型は東西南北の方位を表し、新羅の子午線の標準と決めました。中央部の27段は、新羅の第27代目の王。27段に最上部の井型1段を足した28段は、東洋の基本星座28個。28段に最下部の基壇1段を加えた29段は、陰暦の1ヶ月にあたる29日。窓の上から最上段までの12段と、窓の下から最下部までの12段は、12ヶ月。上下合わせた24段は、24節季。最下部の基壇の12個の礎石は12ヶ月。最下部の4面は、四季を表しているのだそうです。

天文台の内側は窓の高さまで土を埋め、窓から中に入り、内側にも梯子をかけて、上部まで登って天体観測をしました。例えば、春分・秋分の日には底辺（窓の高さ）に太陽光が届き、夏至・冬至の日には太陽光が届かないので、その特徴で四季を区分したようです。農民は農耕暦を使って計画的に種をまき、兵士は天候を予測して戦法に役立て、商人は季節に応じて売買し、巫女は占星術で治世を占い、天文台のおかげで新羅の人々の暮らしは向上したにちがいない。

私はソウルに2年間駐在していたので、慶州に行くたびに善徳女王の足跡をたどりました。なぜなら「夢がない者の時代は一步も前進できない」と言って三国統一による平和な世を目指した意志の強さ。すでに新羅社会に根付いていた儒教に外来の仏教をうまく取り入れた柔軟性。天文・数学・暦学など特権階級だけが知れる学問を万人の暮らしに活用できるように天文台を築いた寛大さが、ユネスコ憲章前文にある世界遺産の意義「心に平和の砦を築く」と重なり、善徳女王に共感を覚えたからです。帰国が決まるとすぐに善徳女王陵に出向き、「世界遺産を通して各国と日本の間に平和の架け橋をかけるために努力するので、応援してください」と墓前に手を合わせてきました。



写真A: 90年かけて創建された新羅最大の皇龍寺跡



写真B: 金冠が出土した王族の円墳封土墳 天馬塚



写真C: 雁鴨池に浮かぶ新羅の別宮 臨海殿址



写真D: 韓国最古の三体石仏



写真E: 現存する東洋で最古の天文台 瞻星台



会費納入のお願い

総会参加の折、来年度の会費（個人は2000円）納入を、未加入の方はぜひ下記の申し込みをお願いいたします。（会員2,000円、賛助会員10,000円、学生会員1,000円）

口座振込をご希望の方は、下記口座へお振込ください。

* ゆうちよ銀行からのお振込

記号17010 番号17908441 口座名義：オガタオサム

* ゆうちよ銀行以外の金融機関からのお振込

店名708（ななせろはち） 口座番号1790844 口座名義：オガタオサム

緒方修の世界遺産紀行

緒方修（おがた・おさむ） 1946年3月熊本生まれ。文化放送を経て、沖縄大学教授（現・客員教授）。NPO法人アジアクラブ理事長。ICOMOS会員。



中城城跡

那覇から高速で名護方面へ向かう。やがて北中城の表示が見える。その手前、右手遠くにパラボラアンテナをふくむ3本のアンテナが立っている。一番左のアンテナの前方に、岩山がある。おむすびを割って右5分の4、左5分の1に分けたような形だ。この岩までペリー一行の探検隊がたどり着き、旗を立てた。ペリーの旗立岩と呼ばれる。一行は中城城にも足を運び、築城の素晴らしさに感嘆した。



今回は世界遺産「琉球王国のグスク群及び関連遺産群」の資産の一つ中城城跡を取り上げるが、その前にペリーがなぜ沖縄に来たかを説明しておこう。その時代のエネルギー源は乏しく、明かりはもっぱら鯨からとれる油。日本近海で鯨を捕るために日本本土に薪炭、水、食料の補給地を設けたい。これが目的であった。そのために日本国内は大騒ぎ、ついには革命と呼ぶべき明治維新が起きてしまった。

ペリー一行は香港から出てまずは1853年に琉球を訪れ、島の周りを測量して回った。航路を探り、港にふさわしい場所を探した。もし江戸幕府が開国を認めない場合は琉球を乗っ取ってしまうという魂胆だったのだ。琉球王府はのらりくらりと対応した。「この島は貧しいので何もごさいません、何卒早めにお引き取り下さい」とアピールした。ところが上陸した隊員たちはものがあふれた市場を見て、王府は嘘をついていると判断。楽隊を先頭に首里城に乗り込んで威嚇した。ペリーが上陸したのは現在の泊北岸、外人墓地の一角

にペリー提督上陸碑が立っている。なお墓地には同行した船員一人が葬られている。酔っぱらって老女にいたずらし、怒った村人たちから石を投げつけられ海に落ちて死んだ。「米軍」の被害第一号、今に続く海兵隊などの暴行第一号だろう。

中城城跡は2000年に首里城跡など8つの資産と共に世界遺産に登録された。護佐丸盛春、中城按司（なかぐすくあんじ）、唐名は毛国鼎の居城。ちなみに下に盛がつく名前はすべて護佐丸の末裔とされる。護佐丸は阿麻和利の策略で謀反を疑われ城攻めに会い、自害。まだ小さかった遺児は乳母に守られ、ひそかに逃れた、と伝えられている。

石垣が見事だ。野面積み、布積（豆腐積み）、あいかた積み（亀甲乱れ積み）の3種類の積み方が見える。ペリー艦隊に同行した挿絵画家が描いた絵が有名だ。2006年には日本の名城百選に入っている。城内からは14～15世紀の中国の陶磁器が発掘されている。中国との交流によって栄えたことが分かる。また明代に開発された銃器の弾丸と石弾が見つまっている。石垣の途中に縦型の長方形がいくつか見えるのは銃眼だろう。種子島より先にここに鉄砲が伝来し、使用されたらしい。高台に上ると西に東シナ海、東に太平洋が見える。



一山向こうの麓にはホテルの残骸が立っている。幽霊屋敷のようなたたずまいが不気味だ。一度訪ねたことがある。中は廃墟だが、屋根付きだ。行き止まりの階段、むき出しの便器、ところどころに大きな黒いしみのある壁。しばらく進むと撮影機を持った男、反射板を持ったアシスタント、その先には胸とお尻を覆っただけのほとんど裸のモデルがいた。世界遺産の城跡の見事さと同じくらい印象に残っている。

スペインの **世界遺産**

五藤 克己（元文化放送記者）



タラゴナ

スペインの北東部、バルセロナの南西約 100 km、地中海に面してタラゴナという都市があります。紀元前 3 世紀にローマ人によって築かれ、イベリア半島最大の都市として栄えました。現在はタラゴナ県の県都です。

多くの古代ローマ遺跡が保存状態よく残されており、2000 年にタラゴナの考古遺跡群として世界の文化遺産に登録されています。

中でも圧巻なのは、地中海を背景にその威容を示す円形闘技場です。1 世紀に建造され、収容人数は 1 万 4 千人という巨大な闘技場でした。猛獣と剣闘士などの戦いが行われ、観客席を埋め尽くす大観衆を熱狂させました。強い日射しのもと、地中海特有の青さと遺跡の古びたレンガ色の対照が際立って、後世の者もまた気持ちが高ぶります。

近くにはローマ時代の長官公邸やシルク・ローマと呼ばれる競馬場の遺跡もあります。

また旧市街を囲む城壁は「考古学の道」として遊歩道となっており、歴史に思いを馳せながら散策することができます。

タラゴナから 4 km ほど離れた郊外には、2 世紀に建造されたラス・ファレラス水道橋が、ほぼそのままの状態に残されています。

この水道橋は「悪魔の橋」という異名を持ち、地元ではこの名前と呼ばれています。これほど貴重な遺跡にもかかわらず全く観光地化されておらず、山あいの谷間にごく自然に存在しています。バス停から樹間の道をしばらく歩いていて、突然目の前にこの水道橋が現れたときの驚きは、いまだに忘れられません。思わず感動の声をあげてしまいました。

水道橋は全長 217m、高さは 26m です。橋の最上部が幅 1 m ほどの水路となっていて、歩いて渡ることができます。私もこわごと、そしてわくわくしながらそのスリルを味わいました。夏の暑い盛りだったためか、私がいた 1 時間ほどの間に、ここを訪れた人はわずかに数人だけでした。遺跡巡りとしては最も恵まれた状況でした。

タラゴナ市内で人々を魅了する絶景ポイントは、「地中海のバルコニー」という広場です。街のメインストリート、ランブラ・ノバ通りの突端にあり、そこからの光景は 180 度以上が地中海です。私は日に何度もこの場所で時間を過ごしました。命名者の銅像が、広場の一面にあったと記憶しています。この命名の効もあってか、世界中から観光客を集めており、CM コピーの傑作と言えるかもしれません。特に地中海の色が刻々と変わってゆく日暮れ時の景色は、時の経つのを忘れさせます。

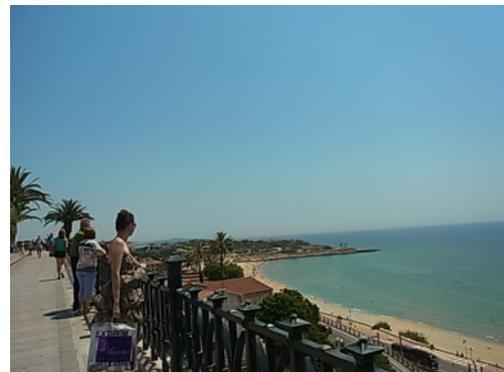
おまけがあります。翌朝、明け方の散歩がてら、またこの場所を訪れました。たまたま満月に近いときで、日の出と月の入りを同時に見ることができました。地中海を舞台に「日は東に、月は西に」の雄大で幽玄な世界を楽しむことになりました。たまにこうした贅沢に出会えるのも、旅の楽しみのひとつです。



円形闘技場



ラス・ファレラス水道橋



地中海のバルコニー